

Pramāṇasamuccayaṭīkā 第 1 章 に見る *Śaṣṭitantra* 注釈書の知覚論
—— *Yuktidīpikā* との関連を中心に ——

近藤 隼人

緒言——先行研究と問題の所在——

古典サーンキヤ (*Sāṃkhya*) 体系を代表する *Īśvarakṛṣṇa* (4–5 世紀) の *Sāṃkhyakārikā* (SK) は, *Vārṣaganya* (3–4 世紀) の *Śaṣṭitantra* (ṢT) 全体を要約したものであることが知られているが, ṢT は現在散逸しており, その具体的な思想内容は明らかになっていない。しかし, FRAUWALLNER [1958] は, 認識論に関する ṢT の断片が *Dignāga* (480–540 年) の *Pramāṇasamuccaya* および自注 *Pramāṇasamuccayavṛtti* (PSV), そして PSV に対する *Jinendrabuddhi* (710–770 年頃¹) の注釈 *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (*Viśālāmalavatī*, PST) に引用・再解釈されていることを PST のチベット訳に基づいて指摘し, 古典サーンキヤにおける認識論の再構築を試みた。STEINKELLNER [1999] はこの FRAUWALLNER [1958] を礎としつつ, 新たに発見された PST のサンスクリット語写本に基づき 第 1 章 *Pratyakṣapariccheda* から ṢT の断片を抽出した。

FRAUWALLNER [1958: pp.104ff.] によると, ṢT には 3 本の注釈書が存在していたとされており, その各見解が PST に散見されるという。STEINKELLNER [1999] と PST 批判校訂版は ṢT 注釈書を **Śaṣṭitantravṛtti* (ṢTV), 各注釈書を ṢTV^a, ṢTV^b, ṢTV^c とし, 各断片をそのいずれかに比定しており, PST では主に ṢTV^a と ṢTV^b の 2 本の注釈書が参照されていたと推測している²。さらにまた ṢTV^b に関しては, *Vārṣaganya* の弟子と目される *Vindhyavāsin* (4 世紀) が著した可能性も指摘されている³。しかし, このような両研究をもってしても ṢT における知覚論の全容は未だ明らかになっておらず, 各 ṢTV の見解も十分に整理されていないのが実情である。そこで本稿では, FRAUWALLNER [1958] と STEINKELLNER [1999] の両研究に立脚してその一部をなぞりつつも, 知覚の発生過程における感覚器官 (*indriya*) とマナス (*manas*) の作用を中心に, ṢT および ṢT 各注釈書における知覚論の一端を明らかにする。その際には, ṢT の知覚定義を引用する PSV1.25a' と同定義の妥当性について論ずる PSV1.32–33 に対する PST の注釈から抽出された ṢT 断片および ṢT 各注釈書の見解に考察を加える。さらにまた, ṢT から SK へという古典サーンキヤ体系の思想史的発展を吟味するためにも, SK に対する注釈書である *Yuktidīpikā* (著者不明, ca. 680–720, YD) の記述を参照しながら, ṢT 各注釈書との比較検討を行う。

¹ Jinendrabuddhi の年代に関しては, 暫定的に PST [introduction: p.xlii] に従う。

² FRAUWALLNER [1958: pp.104–106, pp.112–113] の見解をまとめると, ṢTV^a と ṢTV^b との所説は著しく矛盾し互いに排除しあうものであり, ṢTV^b は ṢTV^a に対する論駁の形をとっているの, ṢTV^a よりも年代的に新しく, より発展した思想を展開させているという。さらにまた, 両注釈とは全く異なる解説が付け加えられていることから ṢTV^c の存在が想定されている。

³ Cf. FRAUWALLNER [1958: pp.113–114].

ṢT の知覚定義

最初に PST は、PSV1.25a' で引用される ṢT の知覚説を掲げる⁴。

ṢT1 (cf. FRAUWALLNER [1958: pp.97ff., p.124], STEINKELLNER [1999: p.669])

*kim anumānam evaikaṃ pramānam/ nety ucyate/ śrotrādivṛttiś ca pratyakṣam/
pramānam iti śeṣaḥ/ śrotravakcaṣurjihvāghrāṇānām manasādhiṣṭhitā vṛtṭiḥ
śabdasparsārūparasagandheṣu yathākramam grahaṇe vartamānā pratyakṣam
pramānam//* PST ad PSV1.25a' [p.136,1-4] //

推理のみが唯一の認識手段であるのか。そうではない、と答える。また、聴覚器官などの作用 (śrotrādivṛtti) がすなわち知覚、「認識手段である」という [語] が [前文の] 残りとして [補われるべきである]。[すなわち] マナスによって統御され (manasādhiṣṭhitā)、それぞれ (yathākramam) 音声・感触・色・味・匂いの把握に対して働く (grahaṇe vartamānā)、聴覚器官・触覚器官・視覚器官・味覚器官・嗅覚器官の作用が、すなわち知覚という認識手段である。

ṢT は推理の一般的定義と結合関係 (sambandha) の種類を示した後、知覚の定義とその説明を与える。この後に PST では各注釈書の見解が伝えられているが、その論題は①「マナスによって統御された」(manasādhiṣṭhitā)、②「把握に対して働く」(grahaṇe vartamānā) とに大別される。この二点に各注釈書の思想が収斂されているため、そこでの感覚器官およびマナスの作用について YD との比較検討を行うが、ṢTV^c に関する記述は ṢTV^b を通じてわずかに言及されるのみであるので、ṢTV^a と ṢTV^b の見解を中心に考察する。

1 “manasādhiṣṭhita” という表現をめぐって

1.1 ṢTV^a と ṢTV^b におけるマナスの作用と観念 (pratyaya) のあり方

最初に ṢT 知覚論におけるマナスの作用について考察する。ṢT1 では “manasādhiṣṭhitā” としてマナスの作用が表現されているが、この表現に対して ṢTV^a と ṢTV^b は異なる解釈をとっている。まず ṢTV^a は “adhiṣṭhāna” を「随伴」(saha) の意に解し、“(manasā) adhiṣṭhitā” は「(マナスと) 共に同一の対象に対して働く」(sahaikatra viṣaye pravṛttā) と解釈している⁵。その一方で ṢTV^b は、“manasādhiṣṭhitā” を「マナスによって感知された (samviditā)」と解釈している。さらに ṢTV^b は「外界対象に対して感覚器官が決定す

⁴ 本稿における PST からの引用文のうち、ボールド体で示したものは PS および PSV からの引用、イタリック体で示したものは ṢT からの引用とする。また、ṢT 断片の番号付けは STEINKELLNER [1999] に拠る。なお、YD の引用中のボールド体は vārttika である。

⁵ ṢTV^a. PST ad PSV1.25a' [p.136,5-7] : *manaseti manovṛtyā/ prakṛtivikārayor abhedopacārād evam uktam/ adhiṣṭhite tena sahaikatra viṣaye pravṛttety arthaḥ/ sahārtho 'trādhiṣṭhānārthaḥ/ tad yathā rājapuruseṇādhiṣṭhitāḥ pravṛttas tena saheti gamyate/* (【訳】「マナスによって」とは、マナスの作用によって [という意味] である。根本原質 (prakṛti) と [その] 変異物とが無区別であると比喩的に表現されるから、そのように (= 「マナスによって」と) 述べられたのである。“adhiṣṭhita” とは、そ [のマナス] と共に同一の対象に対して働く、という意味である。こ [の定義] において adhiṣṭhāna が意味しているものは、随伴 (saha) という意味である。例えば、王の僕 (rājapuruṣa) によって adhi-√sthā されて働く者は、彼 [の王の僕] と共に [働く] と理解されるように。)

る。他方、感覚器官のその決定に対してマナスが追決定する」(*bāhyeṣv artheṣv indriyaṃ vyavasāyaṃ kurute/ tasmīṃs tv indriyavyavasāye mano 'nuvyavasāyaṃ kurute*) という *ṢT* の文言を根拠にして、マナスの作用によって感知されるのは外界対象の形相をとった感覚器官の作用であり、マナスの作用が外界対象を感知することはないと説いている⁶。

この両注釈書間の解釈の相違を別にしても、少なくとも *ṢT* の知覚定義では知覚が感覚器官の作用に帰されている以上、マナスによる *adhiṣṭhita* や追決定 (*anuvyavasāya*) は補助的なものにすぎないということは確言できる。それは裏を返せば、マナスによる *adhiṣṭhita* や追決定が働かない限り、感覚器官の作用は単独で知覚を生み出すことはできないということの意味しており、知覚の発生にはマナスの関与が不可欠であることが理解できよう。このことは次の *ṢTV^b* と *ṢT16'* から知られる。

ṢTV^b (cf. FRAUWALLNER [1958: pp.102ff., p.112])

諸感覚器官の「作用」というのは、自身の対象と近接している際の、そ [の対象] の形相をとっての転変であると知られるべきである。さらにまた、そ [の諸感覚器官の作用] には、観念を伴うもの (*sapratyaya*) と観念を伴わないもの (*apratyaya*) との二種がある。精神原理 (*puruṣa*) に属する覚知 (*pauruṣeyaḥ bodhaḥ*) が観念といわれ、精神性 (*caitanya*) をあり方とし、対象の直接経験 (*anubhava*) を本性とするものである。そしてこ [の観念] がアートマンの本質であり、決して [アートマンとは] 異なるものの [本質] ではない。何故なら、[アートマンと異なるものは] 非精神的であるからである。精神原理に属するその観念と接触して、あたかもそ [の観念] と同一であるかのようになった [諸感覚器官の作用] が、観念を伴う [作用] である。例えば、熱せられた状態にある鉄球は火と接触しているので、そ [の火] を本性としていなくても、あたかも火を本性としているかのようになるように、[諸感覚器官の] 作用は [対象の] 直接経験をあり方としていなくても、精神性との接触によって精神性をあり方としているかのようになる。一方また、あたかも燈火の光のようにただ対象を照らし出すだけであり、精神性との接触によってそ [の精神性] というあり方を獲得したもののように [なら] ない [諸感覚器官の] 作用が、観念を伴わない [作用] といわれる。その中で、観念を伴わない作用を排除するために、「把握に対して働く」といっている。(PST ad PSV1.25a⁷)

⁶ *ṢTV^b*. PST ad PSV1.25a¹ [p.136,8–12]: anye tv āhuḥ — *manasādhiṣṭhītetī manasā* samviditā, yathoktam — *bāhyeṣv artheṣv indriyaṃ vyavasāyaṃ kurute/ tasmīṃs tv indriyavyavasāye mano 'nuvyavasāyaṃ kurute* itī/ anena hi granthenendriyavṛttir eva bāhyaviṣayākārā manovṛttiyā samvedyate, na tv indriyavṛttisahitayā bāhyo 'rtha itī pratipāditam/ tasmād yā śrotrādivṛttir manovṛttiyā grhyate, sā tayādhiṣṭhīte uktā/ (【訳】一方、他の者達 (= *ṢTV^b*) は [次のように] いう— “*manasādhiṣṭhīta*” というのは、「マナスによって」感知された (*samviditā*) [という意味] であり、以下のように [*ṢT* に] いわれているように—「外界対象に対して感覚器官が決定 (*vyavasāya*) する。一方、感覚器官のその決定に対してマナスが追決定 (*anuvyavasāya*) する」(*ṢT2*) と。つまりこの [*ṢT* の] 一節によって、外界対象の形相をとった感覚器官の作用こそがマナスの作用によって感知されるのであり、感覚器官の作用を伴った [マナスの作用] によって外界対象が [感知されるのでは] ない、と説明されているのである。それ故、マナスの作用によって把握される聴覚器官などの作用が、そ [のマナスの作用] によって *adhi-√sthā* (= 感知) されると述べられた。)

⁷ *ṢTV^b*. PST ad PSV1.25a¹ [pp.136,13–137,6]: *vṛttir* indriyāṇāṃ svaviśayasānmidhye tadākāreṇa

ṢT16' (cf. FRAUWALLNER [1958: pp.110ff.], STEINKELLNER [1999: p.674])

bāhyesv artheṣu sāmprate kāle kenacid indriyeṇa yuktaṃ yadā mano bhavati, tadā pratyayavatī vṛttir indriyasya bhavati//PST ad PSV1.33'ab [p.162,9–10] //

外界対象に対して、現在時にマナスがある感覚器官と結びつく場合、観念を有する作用が感覚器官に生ずる。

ṢTV^b は感覚器官の作用を「観念を伴うもの」(sapatyaya) と「観念を伴わないもの」(apratyaya) とに二分し、前者の、観念、すなわち精神原理 (puruṣa) の本質 (精神性 caitanya) と同一になったかの如き感覚器官の作用のみが対象の把握に参与でき、知覚という認識手段 (pramāṇa) となると見なしている。換言すれば、本来非精神的で観念を伴わない感覚器官はそれだけで対象を把握することができず、そのためには精神原理の影響を受ける必要があるということである。ここでは、その精神性の付与が鉄球と火との接触到に喩えられており、鉄球は火に熱せられると赤みを帯びて輝きを放ち、火と無区別であるかのように見えるが、実際には両者は別物である。それと同様に、感覚器官は精神性との接触によって精神性と無区別であるかのように見えるが、鉄球が火との接触によって熱を持つように、感覚器官も精神性との接触により精神的なものとしての様相を呈し、それによって知覚に参与可能となる⁸。また、ṢTV^b は別の箇所では、感覚器官の決定がマナスにおいてそれ自身の対象の顕現を伴い、マナスの決定と接触して観念を有するようになると述べている⁹。そして上の ṢT16' を ṢTV^b の見解と整合させるためには、マナスと結びつくことで感覚器官に観念 (精神性) が付与されると考えられる。さらに、次に示す ṢTV^b にはこのマナスの介在と adhiṣṭhita との関係を窺わせる記述が見られる。

ṢTV^b

もしマナスが外界対象に対して働き、感覚器官の作用に対しては [働か] ないなら、

pariṇāmo jñeyah/ sā punar dviprakārā sapratyayā cāpratyayā ca/ pratyayaḥ pauraṣeyo bodha ucyate caitanyarūpo viṣayānubhavasvabhāvaḥ/ etac cātmanaḥ svarūpaṃ nānyasya kasyacit, acetanatvāt/ tena pauraṣeyeṇa pratyayena saha yā samprkṭā tadekarūpatām ivāpannā, sā sapratyayā/ yathā taptāvasthāyām ayogolakas tejaḥsamparkād atatsvabhāvo 'pi tejaḥsvabhāvatām ivāpadyate, tathā vṛttir ananubhavarūpāpi caitanyasamsargāc caitanyarūpatām ivāpadyate/ yā punar vṛttih pradīpaprabheva kevalaṃ viṣayaprakāśikā, na tu caitanyasamparkād āsāditatadrūpeva, sāpratyayety ucyate/ tatrāpratyayavṛttinivṛttaye **grahaṇe vartamānety** āha/

⁸ この鉄球と火の比喩は、Prabhācandra (11世紀) の *Nyāyakumudacandra* (NKC) にも見られ、ここでは統覚機能に対して精神性が付与されるという文脈の中で引き合いに出されている。NKC [p.190,7–10 (vol.I)] : nanu buddhivyatiriktasya caitanyasya kadācid apy apratīteḥ kathaṃ tatra ci-cchāyāsamkrāntir ity apy asamīcīnam; sato 'py anayor vīvekasya samsargaviṣeṣaśvaśād vipralabdheṇa avadhārayitum aśakteḥ ayogolakavahnivivekavat/ na ca ayogolakavahnayor api abhedha eva ity abhidhātavyam; anyoḥ anyonyāsambhavisamsthānarūpasparśaviṣeṣapratītiḥ anyonyaṃ bhedapratīteḥ/ 他にも、同じく Prabhācandra の *Prameyakamalamārtāṇḍa* (M. KUMAR (ed.), 3rd ed., Sri Garib Dass Oriental Series No.94, Delhi, 1990) [pp.100,16–101,5] や、Vādīdevasūri (12世紀) の *Syādvādaratnākara* (SVR) [p.237,3–5 (vol.I)] にも同趣旨の内容が記載されている。

⁹ ṢTV^b. PST ad PSV1.32cd [pp.155,15–156,1] : manasīndriyavyavasāyaḥ svaviṣayābhāso manovyavasāyena samprkṭaḥ pauraṣeṇa pratyayena sapratyayo bhavati/

それら [感覚器官の作用] はマナスの作用に adhi-√sthā されず、精神原理に属する精神性と接触することがないので、観念を伴わないものとなるであろう。またそれならば、どうして [感覚器官の作用が] 知覚という認識手段であるといえるだろうか。というのも、観念を伴わない [感覚器官の] 作用は知覚という認識手段とはならないからである。(PST ad PSV1.32cd¹⁰)

この記述から、マナスによる adhiṣṭhita は感覚器官の作用が精神性と接触する契機として位置づけられていることが読み取れる¹¹。すなわち、マナスによる adhiṣṭhita を通じてはじめて感覚器官の作用は精神性を獲得し、知覚として認識手段たりうる。先に ṢTV^b が adhiṣṭhita を saṃvidita と解釈していることを確認したが、精神性を付与するというマナスの媒介機能はこの解釈によってより一層明確になったといえよう。以上を要約すると、ṢT 自体の知覚論は別として、少なくとも ṢTV^b においては、マナスを介して精神性が感覚器官に付与されるのであり、知覚の発生過程にはマナスの存在が不可欠であると同時に、認識手段として妥当するためには精神性が必要であるということも理解できよう¹²。

1.2 YD における “manasādhiṣṭhita” と観念

続いて、YD におけるマナスの作用について検討するが、その前に SK における知覚の発生過程について確認しておく。SK において知覚は、感覚器官による外界対象の把握、マナスによる意欲 (saṃkalpa)、自我意識 (ahamkāra) による〈自己との関係付け〉(abhimāna) を経て、最終的に統覚機能 (buddhi) による決定 (adhyavasāya) として発生するものであるとされており、知覚を感覚器官の作用に帰す ṢT とは一線を画している。本稿では、感覚器官から統覚機能へと知覚の帰属先が転換されたその意義に関して特には論じないが、両者の差異を念頭に置きつつ、YD に見られるマナスの作用について考察する。

SK27 ではマナスが「意欲を有するもの」(saṃkalpaka) とされているが、YD はこの「意欲」(saṃkalpa) を “abhilāṣa”, “icchā”, “trṣṇā” など欲求を表す語と同置している¹³。

¹⁰ ṢTV^b. PST ad PSV1.32cd [p.155,9–12]: yadi hi bāhye ’rthe manaḥ pravartate nendriyavṛttiṣu, tadā tā manovṛttibhir anadhiṣṭhitāḥ pauraṣeyena caitanyenāsamprkṛtā apratyayāḥ syuh/ tataś ca katham pratyakṣaṃ pramāṇam ucyaerā/ na hy apratyayā vṛttayaḥ pratyakṣaṃ pramāṇaṃ bhavanti/

¹¹ “adhiṣṭhāna” するものとしての精神原理を説く SK17b’ に対して *Gauḍapādabhāṣya* (G) [p.20,21] や *Māṭharavṛtti* (M) [p.22,24] の注釈には、ṢT 断片として “puruṣādhiṣṭhitam pradhānam pravartate” (【訳】精神原理に adhi-√sthā されて根本原因 (pradhāna) は活動する) とあり (真諦訳『金七十論』(T54, No.2137) [p.1249,b18] にも同様に「自性者人所依故能生變異」(【訓訳】自性は人の所依なるが故に能く變異を生ず) とある)、精神原理による “adhiṣṭhita” が根本原因の活動の契機となることが読み取れる。

¹² ṢTV^c はこの ṢTV^b の見解とは逆に、観念 (精神性) を伴わない感覚器官の作用が認識手段、観念 (精神性) を伴う感覚器官の作用が認識結果として妥当すると見なしている。Cf. PST ad PSV1.33’ab [p.161,9]: yeṣāṃ apy apratyayā vṛttih prāmānyenābhimatā, sapratyayā tu phalam .../ (【訳】ある者達 (=ṢTV^c) にとってもまた、観念を伴わない [感覚器官の] 作用が認識手段として見なされている一方で、観念を伴う [感覚器官の作用] が [認識手段の] 結果として [見なされている] が...)。また、ṢTV^c は別の箇所でも同じ見解を述べている。Cf. PST ad PSV1.25a [p.138,7–8]: anye tv apratyayāṃ eva vṛttim pramāṇam icchanti, sapratyayāṃ tu phalam/

¹³ YD ad SK27a [p.199,14]: saṃkalpo ’bhilāṣa icchā trṣṇetyādy anarthāntaram/

さらに YD は、この“saṃkalpa”を SK31 に対する注釈で「志向」(ākūta) と同置している¹⁴。この SK31 では十三器官が相互の志向に基づいてそれぞれ固有の作用を行うとされているが、YD では「志向」が意図 (abhiprāya) や意志 (abhisandhi) と別様にも言い換えられ、マンゴーを例にとって説明されている。すなわち、最初にマンゴーの姿が視覚器官によって知覚されると、その作用を味覚器官が感知し (saṃvedya)、味覚器官にはマンゴーを得たいという欲求が生じる。その味覚器官の欲求を両足が感知して歩行を始め、そして両手がマンゴーを捉えて味覚器官へと運ぶ、という次第をもって YD は SK31 を解釈している¹⁵が、教義の上で感覚器官は非精神的なものである以上、YD は感覚器官に生じるこの欲求を比喩的表現 (upacāra) としつつ¹⁶、“mansādhiṣṭhita”という表現を用いてさらに発展した議論を展開している。

ある感覚器官が対象に対して活動を起こした場合、マナスはそ [の感覚器官] を通じて対象全体を認識し、[マナスは] そ [の対象] と共存する他の対象を求め、他の感覚器官を [その] 作用によって adhi-√sthā する。[他の対象に対する] 期待を有するそのマナスによって adhi-√sthā された感覚器官は変容する。また、他の教義書 (tantrāntara) にも「各々の器官の対象に対して、マナスが [精神原理の目的を] 達成 (abhisampatti) するために思惟する (√dhyā) 場合、その各々 [の器官] に願望と活動が生じる」といわれている。(YD ad SK31¹⁷)

この用例によると、対象に対する意欲を有するものは感覚器官ではなくてあくまでマナスであり¹⁸、その「マナスによって adhi-√sthā された」感覚器官が対象に対して活動を起こすことが読み取れる。ここでの「他の教義書」(tantrāntara) が具体的に何を指すかは不明であるが、YD と同様の思想を説いているとすれば、マナスによる adhi-√sthā は「思惟」(√dhyā) と近い意味合いで用いられていることが推知される。そして非精神的な感覚器官が単独で対象に対して働くことはないので、その仮定のもとではマナスによる“adhiṣṭhita”が感覚器官による対象把握の契機として位置づけられていることが窺える。実際、続く YD の箇所でも、対象に対する意欲を持ったマナスと接触することによって、

¹⁴ YD ad SK31 [p.214,22–23] : ākūtam icchā saṃkalpo mana ity arthaḥ/

¹⁵ YD ad SK31 [pp.213,34–214,4] : yadā caḥṣuṣāmrādāḍimādirūpam upalabdham bhavati tadā rasanendriyam upāttaviṣayasya caḥṣuṣo vṛtṭim saṃvedya svaviṣayajighṛkṣayautsukhyavad vikāram āpadyate/ rasanasya vṛtṭim saṃvedya pādaḥ viharāṇam ārabhete hastāv ādānam tāvad yāvad asau viṣayo rasanendriyayogyatām (ā)nītaḥ/ tato rasanam svaviṣaye pravartate/ (()) 部分は編者による修正を示す。

¹⁶ YD ad SK31 [p.214,13–17] : na upacārāt/ prāg evopadiṣṭam asmābhir apratyayam indriyam iti/ kiṃ tarhi/ svaviṣayasya paṭoḥ saḥacārīṇam artham indriyāntaraviṣayatām āpannam saṃsprṣya saṃsprṣya svabhāvata indriyāntaram svaviṣayam prati sākāṅkṣam bhavati/ tatsannidhau vikriyādarśanāt tatra saṃvedanam upacaryaivam ucyata ity adoṣaḥ/

¹⁷ YD ad SK31 [p.214,24–29] : yadā kiṃcid indriyam viṣaye pravṛtṭam bhavati tadā tadvāreṇa samastam artham upalabhya (manas) tatsahacārī(ṇam) arthāntaram ākāṅkṣad indriyāntaram vṛṭty(ādhi)tiṣṭhate/ tenākāṅkṣāvātā manasādhiṣṭhitam indriyam vikriyam āpadyate/ tathā ca tantrāntare 'py uktam “yasya yasyendriyasya viṣayam mano dhyāty abhisampattiarthena tasya tasyautsukyam pravṛtṭis ca bhavati” iti/

¹⁸ 脚注 14 で引用した YD では、SK31 中の“ākūta”がマナスと同置されているので、そのことから“ākūta”はマナスに帰属するものであることが裏付けられる。

感覚器官が自身の対象へと向かう旨が記されている¹⁹ことからその推察は裏付けられる²⁰。また、マナス自体も感覚器官と同様に非精神的なものであるため、感覚器官に生じる願望や活動の契機となるマナスの背後には、唯一精神的なものである精神原理の存在が必ずや要請される。換言すれば、感覚器官に精神的活動が生じるためには、マナスを通じて精神性が付与されることが必要不可欠となる。この SK31 では知覚が論じられているわけではないが、精神原理を背景とする非精神的なものに対する精神性の付与、というその構造自体は先に見た ṢṬV^b における〈感覚器官—マナス—精神原理〉の関係と呼応しているといえる。その実、あくまで比喩的表現としながらも、精神性（精神原理）との接触によって器官が観念を有するようになる様が YD にも描かれている。

したがって、精神原理と結合しているが故に器官に対して観念〔の存在〕が比喩的に表現され、また〔三〕要素と結合しているが故に精神原理に対して行為主体であると比喩的に表現されるというのは、理に適っている。（YD ad SK20²¹）

ところが YD では、「これは牛に他ならない」「これは人に他ならない」というような統覚機能による決定 (adhyavasāya) と「観念」が同義と見なされており²²、ṢṬV^b における精神原理の本質としての「観念」と異なるように思われる。しかしその一方で、YD の別の箇所からは、対象認識の成立要件として「精神原理の観念」(puruṣapratyaya) を必要としている旨も読み取れる。

あたかも壺などの対象が認識 (jñāna) なくしては、それをあり方としており、それをあり方としていないのではないとは理解されないように、認識もまた精神原理の観念 (puruṣapratyaya) なくしては、対象をあり方としており、対象をあり方としていないのではない〔とは理解されない〕。（YD ad SK5ab'²³）

¹⁹ YD ad SK31 [p.214,33–34] : svaviśayasamkalpānughṛitasya manasaḥ saṃsparśāt svayam evendriyaṃ svaviśayaṃ pratipadyate/ (【訳】自身の対象に対する意欲によって裨益されたマナスと接触することによって、感覚器官自らが自身の対象へと向かう。)

²⁰ Vācaspatimiśra (10世紀)の *Sāṃkhyatattvakaumudī* (STK) には“manasādhiṣṭhita”を複合語にした“mano'dhiṣṭhita”という表現が登場するが、ここでも YD と同じく対象把握の契機と位置づけられていることがわかる。STK ad SK27 [p.132,27–29] : ekādaśasv indriyeṣu madhye “**mana ubhayātmakam**” buddhīndriyaṃ karmendriyaṃ ca/ cakṣurādīnām vāgādīnām ca mano'dhiṣṭhitanām svaviśaye pravṛtteḥ/ (【訳】11の感覚器官の中で「マナスは両者を本性とする」、[すなわち]「マナスは」知覚器官でもあり、行為器官でもある。視覚器官など〔の知覚器官〕も発声器官など〔の行為器官〕も〔共に〕マナスに adhi-√sthā されて、自身の対象に対して働くからである。)

²¹ YD ad SK20 [p.182,11–12] : tad yuktam etat puruṣasamyogāt karaṇasya pratyayopacāraḥ puruṣasya ca guṇasamyogāt kartṛtvopacāra itī/

²² Cf. 茂木 [1984: p.124]. Cf. YD ad SK23a [p.188,18–19] : gaur evāyaṃ puruṣa evāyam itī yaḥ pratyayo niścayo 'rthagrahaṇam so 'dhyavasāyaḥ/. 同様に、「観念」を「確定」(niścaya) と同置する記述が YD ad SK28 [p.203,5–6] (tathā viśayendriyavṛttyanukāreṇa niścayo gaur ayaṃ śuklo dhāvātīty evamādīḥ pratyayaḥ) に見られる (cf. Moreḡ [2000: p.56]).

²³ YD ad SK5ab' [p.78,4–6] : yathaiva hi ghaṭādayo 'rthā jñānam antareṇa na tadrūpā nātadrūpā itī śakyaṃ pratipattum evaṃ jñānam api puruṣapratyayam antareṇa na viśayarūpam nāviśayarūpam/ (※“itī śakyaṃ”の部分は、批判校訂版では“itī na śakyaṃ”となっているが、“na”を省略するアーメグバード写本 (deposited at the Lālbhāi Dalpatbhāi Indological Institute) の読み (YD 批判校訂版脚注に拠る) に従った。)

この一節からは、YDも $\$TV^b$ と同様に「観念」が精神性を意味していることが推知されるが、「観念」が精神性であれ統覚機能による決定であれ、教義上そもそも精神的な活動は統覚機能には存在しえないので、いずれにせよ「観念」は精神性を指すと考えるのが妥当であると考えられる²⁴。その意味では「決定」と同置される「観念」も本来は精神原理に属しており²⁵、精神原理との接触によって統覚機能が「観念」を有するものとなり認識手段たりうると推測される。実際、YDは認識手段・認識結果を論ずる文脈の中でも、認識結果は精神原理を、認識手段は統覚機能をそれぞれ拠り所としており、さらに認識結果は、認識手段による<精神性という能力>(cetanāsakti = 精神原理)に対する裨益(anugraha)である²⁶と論じており、精神原理(精神性)を認識手段論と関連づけて説いていることが窺知される。その意味でYDは、「観念」すなわち精神性を認識手段の根拠とする $\$TV^b$ と軌を一にしているといえる。さらにまた、YDは統覚機能を認識手段の帰属先としているが、知覚を感覚器官に帰す $\$T$ と統覚機能に帰すSKとの差異を別にすれば、いずれにおいても「観念」を介して知覚という認識手段となることが読み取れる。すなわち、知覚が感覚器官の作用であるにせよ統覚機能の作用であるにせよ、知覚に「観念」が必要とされる旨は $\$T$ 、特に $\$TV^b$ やYDから共通して窺い知れ、さらに“manasādhiṣṭhita”という $\$T$ に見られる用語を残しているYDが、 $\$T$ 研究に何らかの解明の光を投げかけることは否定し難いといえよう。

1.3 二器官の同時作用

先に $\$TV^a$ は“adhiṣṭhita”を「随伴」と解し、感覚器官とマナスとが同一の対象に対して働くこと想定していたが、この見解に対して $\$TV^b$ は次のように批判している。

$\$TV^b$

いやしかし、マナスは感覚器官の決定を伴って外界対象に対しても現在時に活動する

²⁴ YD ad SK28ab [pp.202,10–203,13] では、 $\$TV^b$ と同様に、感覚器官それ自体は「観念を伴わないもの」(apratyaya)であると結論づけられており、この点からもYDにおける「観念」が精神性を指していることが窺い知れる。

²⁵ Vātsyāyana (Pakṣilasvāmin, 5世紀?)のNyāyasūtrabhāṣya (A. THAKUR (ed.), Nyāyacaturgranthikā Vol.I, New Delhi, 1997)では、“buddhi”が恒常であると主張するサンキヤとの対論の中、Nyāyasūtra 3.2.3に対する注釈では、この推察を裏付けるかのように精神原理の属性(puruṣadharma)として「観念」(pratyaya)や「決定」(adhyavasāya)が挙げられている。Cf. Nyāyasūtrabhāṣya ad Nyāyasūtra 3.2.3 [p.176,11–12]: puruṣadharmaḥ khalv ayaṁ jñānaṁ darśanam upalabdhir bodhaḥ pratyayo 'dhyavasāya iti/

²⁶ Cf. 中井 [1981: pp.61–62], 村上 [1982: pp.177–178], Kondo [2010].

YD ad SK5ab' [pp.77,20–78,2]: phalasyārthāntarabhāvaḥ adhikarāṇabhedāt/ buddhyāśrayaṁ hi pramāṇam adhyavasāyākhyam puruṣāśrayaṁ phalam anugrahalakṣaṇam/ na ca bhinnādhiparāyoraṇor ekatvam arhati bhavitum/ (【訳】 [認識] 結果は [認識手段と] 異なるものである。基体 (adhikarāṇa) の差異があるから、認識手段は統覚機能を拠り所とし、決定と呼ばれるものであり、[認識] 結果は精神原理を拠り所とし、裨益を特質とするものである。そして基体を異にするので [認識手段と認識結果とが] 同一であることはあり得ない。)

YD ad SK5ab' [p.77,8–9]: etat pramāṇam/ anena yaś cetanāsakter anugrahas tat phalam/ (【訳】 これ (=知覚) は認識手段である。そ [の認識手段] による<精神性という能力>に対する裨益が [認識] 結果である。)

ときに、[そのマナスに] 知覚の決定がありうるものであり、その後 [マナス] のみに想起の決定があるのではないか。これは [正しく] ない。このように外界対象を把握する場合、[感覚器官とマナスとの] 両者が同一の目的を果たすので、感覚器官が無益なものとなってしまふであろう。また実際、[次のようにも] [ṢT に] いわれている—「**両器官 (= 感覚器官とマナス) が同一の目的を果たすことは想定されえない**」(ṢT13', 18) と。(PṢT ad PSV1.32cd²⁷)

ṢTV^b による批判の論拠は、(i) 感覚器官が無益なものになってしまうことと (ii) 「**両器官 (= 感覚器官とマナス) が同一の目的を果たすことは想定されえない**」(*naikārthakāriṇor indriyayoḥ kalpane sāmāthyam*) という ṢT 断片の二点である。最初の論拠 (i) は、マナスが対象に対して直接に働く場合には感覚器官が無用なものとなるということであるが、この点に関しては「門と門衛の関係」からも明白である²⁸。すなわち、門 (dvāra) としての感覚器官が対象を直接に把握し、門衛 (dvārin) たる内的器官はその門を通じた対象に対して働く、という感覚器官と内的器官との関係を説く比喻の一種であるが、これは PṢT 内の ṢT 断片や SK35cd にも見られる²⁹ ことから学派内で伝統的に用いられた説明法であることがわかる。これは裏を返せば、マナスあるいは内的器官が対象に対して直接に働くことがないということも伝統的に論じられてきた³⁰ ことの根拠となろう。さらにまた、論拠 (ii) の ṢT 断片に関しては、「門と門衛の関係」からも理解できることであるが、この ṢT 断片に照らせば、マナスが感覚器官に随伴すると説く ṢTV^a の見解は成立しないものの、古典サーンキヤの古層にこのような異説が存在していた³¹ ことは注目に値しよう。さらに着目すべきは、この ṢT 断片と同趣旨の文言が YD にも登場することである。

²⁷ ṢTV^b. PṢT ad PSV1.32cd [p.156,5–8]: nanu cendriyavyavasāyahitasya bāhye 'py arthe pravṛttasya sāmprate kāle manasaḥ pratyakṣavyavasāyo bhaviṣyati, kevalasya tu paścāt smṛtivyavasāyah/ naitad asti/ evaṃ bāhyarthagrahaṇe sati dvayor apy ekārthakāritvād ānarthakyam indriyāṇaṃ syāt/ tathā hy uktam — *naikārthakāriṇor indriyayoḥ kalpane sāmāthyam/*

²⁸ Cf. YD ad SK30d [pp.212,28–213,1]: na tāvad buddhyahamkāramanaśaṃ sākṣād bāhyārthagrahaṇasāmāthyam asty antaḥkaraṇānupapattiprasaṅgāt śrotṛādīvīyarthaprasaṅgād dvāridvārabhāvavyāghātprasāṅgāc ca/ tasmāt pūrvam śrotṛādīnām arthasambandho 'sti/ (【訳】まず、統覚機能・自我意識・マナスが外界対象を直接に把握することはできない。何故なら、内的器官としての妥当性がなくなるということが帰結するから、聴覚器官が無益なものとなることが帰結するから、そして門衛と門の関係が損なわれることが帰結するからである。それ故、最初に聴覚器官などが対象と結びつく。)

²⁹ ṢT14' (PṢT ad PSV1.33'ab [p.160,12–13]): tasmān mana eva dvāri dvārāṇīndriyāṇi/ (cf. FRAUWALLNER [1958: p.111], STEINKELLNER [1999: p.673]).

SK35cd [p.221,7]: tasmāt trividham karaṇam dvāri dvārāṇi śeṣāni/

³⁰ NKC にもサーンキヤの所説として、マナスが外界対象に対して働かないことが示されており、仮に外界対象に対してマナスが働く場合には、感覚器官が無益なものになってしまうとして ṢTV^b や YD と同様の記述が見られる。NKC [p.40,6–7 (vol.1)]: atha kasmān manovṛttīḥ akṣavṛttīyālambanā na śabdāyālambanā iti cet; abahirvṛttivāt, anyathā bāhyendriyakalpanānarthakyaṃ syāt/

³¹ 護法 (Dharmapāla, 530–561?) の『大乘廣百論積論』(T30, No.1571) 第五「破根境品」には、心 (manas?) が対象に向かって認識、分別すると考えるサーンキヤの一派が伝えられており (cf. 本多 [1980: p.196, p.201]), マナスが対象へと向かうという説が実際に存在していたことが窺える。T30 [p.228,b22–23]: 復次有數論者作是執言。心往境處方能了別。 (【訓読】復た次に有る數論者 是の執 作して言わく、心 境處に住きて方に能く了別すと。)

感覚器官も照らし出すものであり、燈火も〔照らし出すもの〕であるならば、その場合、両者のうち一方が無用であることが帰結する。どうしてか、何故なら、同一の目的を果たす二者が同時に働くことは不可能であるといわれているからである。(YD ad SK28ab³²)

YD では内的器官が照らし出すものと見なされている³³ため、この引用箇所では感覚器官が照らし出すものであることを否定しようとしているが、上掲の $\$T V^b$ と同様に「同一の目的を果たす二者が同時に働くことは不可能である」(na hy ekārthakāriṇor yugapatkaraṇe sāmāthyam asti) という言説³⁴に基づいて、感覚器官による照明が否定されている。さらにまた、反論者の言ではあるが、SK17c に対する YD の注釈にもこの $\$T$ 断片に近似した表現が見いだされる。その文脈では、統覚機能が決定をあり方とするように精神原理が精神性をあり方とするならば、精神性が統覚機能に従う、あるいはその逆である場合、そのあり方として両者に差異がないので、いずれかを想定する必要はないとされている。その意味で“na hy ekā(rtha)kāriṇor³⁵ yugapatkalpane sāmāthyam asti” という文言が引用されている。ここでは同じ目的を果たす二原理を同時に想定することは不可能であるということが読み取れる³⁶。これらの言説は上の $\$T$ 断片と類似しており、 $\$T$ からの引用を権証とした可能性が強い。このように考えると、この $\$T$ 断片が意味するところは二器官に限られるものであろうが、YD はその意趣を拡張して、古典サーンキヤで説かれる二十五原理内での独立した原理の中の二者が同一の目的を果たして同時に働くことはない、と読み替えたということも可能であろう。YD のこの文言が $\$T$ に基づいたものであるならば、YD は $\$T$ の権威を認め、 $\$T$ を重要視していたことの一証左となろう。OBERHAMMER [1961] は YD に登場する 11 の “śāstra” を $\$T$ と比定したが、この OBERHAMMER [1961] の推断と上記の推察とを同時に勘案すれば、 $\$T$ を強く意識した YD 作者の著作態度が窺える。

さらに付記すれば、対象を認識する際、対象に対応する感覚器官と三内的器官という四者が同時に作用するのか、それとも順次に作用するのか、という問題を論ずる SK30³⁷ に対する注釈では、各注釈書中唯一 YD だけが「同時作用説」を排して「順次作用説」のみが正当であると明言している³⁸ 事実を鑑みても、先の YD の文言がこの $\$T$ 断片の思想に

³² YD ad SK28ab [p.202,26–28] : indriyam api prakāśakaṃ praḍīpo `pi/ tatrānyatarasyānupādānaṃ prasaktam/ kasmāt/ na hy ekārthakāriṇor yugapatkaraṇe sāmāthyam astī/

³³ YD ad SK32ab [p.216,10] : prakāśam antaḥkaraṇaṃ karoti niścayasāmāthyāt/ (【訳】内的器官は照明を為す。何故なら〔内的器官は〕〔対象を〕確定することができるからである。)

³⁴ この “yugapatkaraṇe” の箇所は、YD 写本 Dkha (referred to in the Manuscript D (deposited at the National Archives, New Delhi) as *kha pustaka*) には “yugapatkalpane” とあり、これを採用するときさらに $\$T$ 断片に近似する (写本の読みは YD 批判校訂本脚注に拠る)。

³⁵ All the Mss read *ekāntakāriṇor*.

³⁶ YD ad SK17c [p.171,20–24] : yadi tarhi yathā vyavasā(ya)rūpaṃ tathā caitanyarūpaṃ evaṃ sati vyavasāyamātraṃ parikalpaṇīyaṃ caitanyamātraṃ vā/ kasmāt/ na hy ekā(rtha)kāriṇor yugapatkalpane sāmāthyam asti rūpāntarābhidhānaṃ vā/ atha vyavasāyacaitanyayoḥ padārthāntaram eveti niyato viśeṣyate tarhi vaktavyam idam amuṣyaivaṃ rūpaṃ nāmuṣyeti/

³⁷ yugapac catuṣṭayasya tu vṛttih kramaśāś ca tasya nirdiṣṭā/ drṣṭe tathāpy adṛṣṭe trayasya tatpūrvikā vṛttih//SK30//

³⁸ Cf. YD ad SK30 [p.212,3–4] : yad uktaṃ śrotrādīnām antaḥkaraṇasya cābhinnakālaṃ vṛtirit ity atra brūmaḥ ayuktam etat/ (【訳】聴覚器官と内的器官の作用が時間を異にせず (=同時に) あると〔汝に

扱ったことを窺わせる一事例といえよう。

2 “grahaṇe vartamānā” にまつわる感覚器官の作用

2.1 ŚTV における感覚器官の作用

■ 対象の形相をとる感覚器官

続いてもう一方の “grahaṇe vartamānā” という表現に関連して感覚器官の作用について検討する。上に挙げた ŚTV^b の記述にあったように、感覚器官が対象と近接している場合、感覚器官が対象の形相をとって転変することが感覚器官の作用であると ŚTV^b は見なしている。実際に ŚTV^b の著者とされる Vindhyavāsin は、感覚器官が対象の形相をとることを知覚と考えていたことが他派の文献より窺い知れる³⁹が、この見解は ŚTV^a の議論にも登場する⁴⁰ ので、Vindhyavāsin に限った見解ではないことがわかる。このことから、対象把握時に感覚器官がその対象の形相をとるという見解は、いわゆる Vārṣaṅya 派に共通する見解であった可能性も指摘できる。実際、他派の文献でも Vārṣaṅya の知覚定義である「聴覚器官などの作用」(śrotrādivṛtti) を挙げつつ、対象の形相をとって転変すると解説されている⁴¹ ことからその推察は裏付けられる。

また、既述のように ŚTV^b は感覚器官の作用が「観念を伴うもの」であるからこそ対象の把握に対して働くと思なしているが、その一方で Vindhyavāsin が「聴覚器官の作用であり、分別を離れたもの」(śrotrādivṛtti avikalpikā) という知覚定義を唱えていたことが知られている⁴²。ŚTV^b は別の箇所でも、この「分別を離れた」感覚器官の作用を “grahaṇe

よって] 述べられたことに関して答える。このことは理に合わない。)

³⁹ Guṇaratna (14 世紀) の *Tarkarahasyadīpikā* (M. KUMAR (ed.), *Bhāratiya Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā: Saṃskṛta Granthāṅka No.36, Varanasi, 1969*) [p.155,7-9] は “śrotrādivṛtti avikalpikā” という Vindhyavāsin の知覚定義を解説する中で、“śrotrādīnīndriyāṇi, teṣāṃ vṛttir vartanaṃ pariṇāma iti yāvat, indriyāṇy eva viśayākāraparīṇātāni pratyakṣam iti hi teṣāṃ siddhāntah/” (【訳】「聴覚器官など」[すなわち] 諸感覚器官、それら [諸感覚器官] の「作用」[すなわち] 活動、転変という意味である。対象の形相をとって転変した感覚器官こそが知覚である、というのが彼ら [サーンキヤ学派] の定説である。) と述べている。(cf. HATTORI [1968: p.148, 5.1])

⁴⁰ ŚTV^a. PST ad PSV1.25a' [p.137,9-13]: indriyaviśayāntarāvartini kaśābhghātavad ūrdhvākṣiptajalavad vā viśaye svasminn apratiṣṭhitā vṛttir ucyate/ pratiṣṭhitā tu viśayākāreṇa pariṇāmena pariṇiṣpannā grahaṇam iti/ yatrāpi cāntarālam nāsti ghrāṇādaṃ tatrāpīndriyasya viśayasamīyogānantaram vikriyopajāyamānā viśayākāratvenāpariṇiṣpannā vṛttir jñeyā/ tathā pariṇiṣpannāntargrahaṇam iti//

⁴¹ Cf. Vācaspatiśra's *Nyāyavārttikātāparyāṭīkā* (A. THAKUR (ed.), *Nyāyacaturgranthikā Vol.III, New Delhi, 1996*) [p.126,22-23]: vārṣaṅyasyāpi lakṣaṇam ayuktam ity āha — śrotrādivṛttir iti/ pañcānām khalv indriyāṇām arthākāreṇa pariṇātānām ālocanamātram vṛttir iṣyate/ (【訳】「ヴァールシャガニヤの」定義「もまた」理に合わないとして [次のように] 述べている—「聴覚器官などの作用」と。対象の形相をとって転変した五感覚器官の作用は感覚のみ (ālocanamātra) (cf. SK28ab) であると認められている。) (cf. HATTORI [1968: p.148, 5.1])

また、Akalaṅka (8 世紀) 著 *Nyāyaviniścaya* の挙げる “śrotrādivṛttiḥ pratyakṣam yadi taimirikādiṣa” (168) に対して Vādirājasūri (11 世紀) は次のように解説している。Cf. *Nyāyaviniścayavivarāṇa* (M. KUMAR (ed.), *Bhāratiya Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā: Saṃskṛta Granthāṅka No.3, Kāśī, 1949*) [p.534,16 (vol.I)]: śrotram ādir yasya cakṣurādes tasya vṛttir viśayākāraparīṇāṭiḥ yadi cet pratyakṣam/

⁴² 脚注 39 参照。他にも Abhayadevasūri (11 世紀) の *Tattvabodhavidhāyini* (S. SAṂGHAVĪ (ed.), *Kyoto, 1984*) [p.533,2 (vol.II)]: “śrotrādivṛtti avikalpikā” iti vindhyavāsiḥ pratyakṣalakṣaṇam anenaiva

varṭamānā”と関連づけて説明しており、それによると感覚器官の作用は対象そのもの (svarūpa) の把握に対してのみ働くという⁴³。そして上記 ṢTV^b の見解とを考え合わせると、感覚器官の作用が対象そのものを把握するというこの説明が同時に「対象の形相をとる感覚器官」をも意味し、それこそが“grahaṇe varṭamānā”の意味であると考えられる。

■ 感覚器官による決定

続いて、感覚器官のなす決定 (vyavasāya) に対して考察する。先述のように、PṢṬ に見られる ṢT 断片には「感覚器官による決定」(indriyavyavasāya) という表現が散見される。

ṢT7 (ṢT2, 8, 9 にも同様の表現) (cf. FRAUWALLNER [1958: p.106], HATTORI [1999: p.157,n.58], STEINKELLNER [1999: p.671])

bāhyeṣv artheṣv indriyaṃ vyavasāyaṃ kurute/ tasmims tv indriyavyavasāye mano 'nuvyavasāyaṃ kurute/ yathā cendriyavyavasāye mano 'nuvyavasāyaṃ kurute, evaṃ mānaśaṃ vyavasāyaṃ indriyaṃ saṃvedayate// PṢṬ ad PSV1.32ab [p.151,3–5] //

外界対象に対して感覚器官は決定 (vyavasāya) する。一方、感覚器官のその決定に対してマナスが追決定 (anuvyavasāya) する。また、感覚器官の決定に対してマナスが追決定するように、感覚器官はマナスによる決定を意識する。

ṢT13 (cf. FRAUWALLNER [1958: pp.110ff.], STEINKELLNER [1999: p.673])

kiṃ bāhyeṣv artheṣv indriyamanobhyāṃ saḥavyavasāyāḥ/ nety ucyate/ kasmāt/ naikārthakāriṇor indriyayoḥ kalpane sāmāthyam// PṢṬ ad PSV1.33'ab [p.160,1–3] //

外界対象に対して感覚器官とマナスとが共に決定するのか。そうではない、と答える。どうしてか。両器官 (= 感覚器官とマナス) が同一の目的を果たすことは想定できない [からである]。

ṢT14 (cf. FRAUWALLNER [1958: p.111], STEINKELLNER [1999: p.673])

nirastam/ (cf. CHAKRAVARTI [1951: p.145,fn.4])

⁴³ ṢTV^b. PṢṬ ad PSV1.25a' [p.138,1–6] : anye tv āhuḥ — vṛttināṃ nirvikalpatvopadarśanārtham etad bhedenoḥkaṃ śabdādīnāṃ grahaṇe varṭamāneti/ etad uktaṃ bhavati — svarūpagrahaṇamātre varṭamānā pratyakṣaṃ pramāṇaṃ nānyatheti/ yady api vikalpane 'syāḥ sambhavo nāsti, tathāpi jaiminiyādibhir vikalpakaṃ pratyakṣaṃ kalpitam/ tadapekṣayaitad viśeṣaṇam/ sarvaiva tu vṛttir grahaṇamātre vartate, na vikalpana iti/ grahaṇe varṭamāneti tatsvabhāveti arthaḥ/ (【訳】他の者達 (=ṢTV^b) は [次のように] いう— [諸感覚器官の] 作用が分別を離れていることを示すために、次のように区別して述べられた。[すなわち]「音声」などの「把握に対して働く」と、以下のことがいわれたことになる—ただ [対象] そのものの把握のみに対して働く [作用] が知覚という認識手段であり、それ以外のものではない、と。たとえ [作用が] 分別を伴うことに対する可能性がありえないとしても、ミーマーンサー学派 (jaiminiya) などによって分別を伴う知覚が想定されている。そのことを念頭においてこの限定要素がある。一方、すべての作用は [対象の] 把握のみに対して働くのであって、分別に対して [働くの] ではない。「把握に対して働く」というのは、[作用が] その <把握に対して働くこと> を本性とする、という意味である。)

manasy ekībhūtān indriyavyavasāyān puruṣaś cetayate, na tv indriyavyavasāyair manovyavasāyān iti/ tasmān mana eva dvāri dvārāṇīndriyāṇi// PṢṬ ad PSV1.33'ab [p.160,11–13] //

マナスにおいて一体となった感覚器官の諸決定を精神原理は意識するが、感覚器官の決定によってマナスの諸決定を「意識するのでは」ない、と。それ故、マナスのみが門衛であり、感覚器官が門である。

このように *ṢṬ* の想定する知覚においては、感覚器官による決定が働くことがわかるが、その後に働く、マナスによる追決定も知覚に含まれるか否かは以上の断片から判ずることはできない⁴⁴。また、*ṢṬV^a* と *ṢṬV^b* も *ṢṬ* と同様にこの感覚器官による決定を認めていたことが見てとれ⁴⁵、中でも *ṢṬV^b* は、この感覚器官による決定を知覚の定義と見なしていたことも窺い知れる⁴⁶。既に述べたように、*ṢṬV^b* は “*grahaṇe vartamānā*” を感覚器官が対象の形相をとることと考えていたと思われるので、*ṢṬV^b* にとってはその感覚器官が対象の形相をとることが、すなわち感覚器官による決定を意味していることが推察される⁴⁷。

2.2 YD における感覚器官の作用

一方、SK28ab において感覚器官の作用は「感覚のみ」(*ālocanamātra*) とされているが、この対象の形相をとる感覚器官に関しては、拙稿 KONDO [2010] で明らかにしたように、SK 注釈書中 YD のみが支持していることは注目に値する点であろう。YD は、「感覚」(*ālocana*) を「把握」(*grahaṇa*) と同置し⁴⁸、その「把握」を感覚器官の作用として *ṢṬV^b* と同様に、対象との接触によって感覚器官が対象の形相をとって対象と同形になることであると見なしている⁴⁹。なお、SK 以降の他派の文献にも、サーンキヤ説として「対象の形

⁴⁴ 脚注6で挙げた *ṢṬV^b* の見解によると、“*manasādhiṣṭhitā*” を「マナスによって感知された」と説いた上で、その「感知」を *ṢṬ2* 中の「追決定」に引き寄せて説明しているの、マナスによる追決定も知覚の発生過程に含まれるといえよう。

⁴⁵ *ṢṬV^a*. PṢṬ ad PSV1.32cd [p.153,12–13] : *śrotrādivṛttir bāhye 'rthe pratyakṣaṃ pramāṇam/ tasmīṃs tv indriyavyavasite 'rthe manaḥ paścād vyavasāyaṃ kuruta ity arthaḥ/* (【訳】外界対象に対する聴覚器官などの作用が知覚という認識手段である。一方、感覚器官によって決定されたその対象に対してマナスは後に決定する、という意味である。)

ṢṬV^b. PṢṬ ad PSV1.33'ab [p.161,5]: *indriyavyavasāyānāṃ ca manasy ekībhāvād arthavattvam uktam, nānyathā/* (【訳】感覚器官の決定はマナスにおいて一体となるから目的を有するものといわれるが、それ以外ではない。)

⁴⁶ *ṢṬV^b*. PṢṬ ad PSV1.32cd [p.154,7] : “*bāhyeṣv artheṣv indriyaṃ vyavasāyaṃ kurute*” *pratyakṣalakṣaṇam/* (【訳】「外界対象に対して感覚器官は決定する」(*ṢṬ*) というのが知覚の定義である。)

⁴⁷ 脚注6の引用からも同見解が抽出される。(cf. 中井 [1980: pp.99–100])

⁴⁸ Cf. YD ad SK28ab [p.201,17–18] : “*ālocanam*” *grahaṇam ity anarthāntaram/*

⁴⁹ Cf. YD ad SK28ab [p.203,4–7] : *viśayasamparkāt tādrūpyāpattir indriyavṛtti(r) grahaṇam/ tathā viśayendriyavṛtṭyanukāreṇa niścayo gaur ayaṃ śuklo dhāvatiṣ evamādiḥ pratyayaḥ/ tathā viśayasamparkāpagame śrotrādivṛtṭes tādrūpyāpagamo (iti) vartamānakālātā grahaṇasya/* (【訳】対象との接触によって、[感覚器官が] その[対象] と同形になることが感覚器官の作用であり、[それが] [対象の] 把握である。また、対象や [対象と同形になった] 感覚器官の作用に模することによって、「これは牛である」「これは白い」「これは走る」などのような観念が決定である。また、対象との接触が止むと、聴覚器官などの作用と同形になることも止むから、[対象の] 把握は現在時 [のみに働くもの] である。)

相をとる感覚器官の作用」の記述が見られる⁵⁰が、これは SK 自体の所説であるのか、SK 以前の Vārṣaganya 派の所説を述べたものであるのか、それとも ŚT や SK も含めたサーンキヤ全体に通底する考え方であるのか定かではない。少なくともこの見解が SK および SK 注釈書においても YD 以外には見られないのは事実である以上、ŚT および ŚTV 研究には YD の解説が不可欠であることを示唆しているともいえる。

しかし、その一方で YD には ŚT の説くような感覚器官による決定が説かれていないが、SK では知覚が感覚器官ではなく統覚機能に属している点を考慮すれば、SK の注釈書である YD が感覚器官による決定を説かなかったのは至極当然な態度であるといえる。しかし、中井 [1980] や有賀 [2003: pp.95-98] にも指摘されているように、『金七十論』や *Sāmkhyavṛtti* (V₂)、M には「感覚器官による決定」を窺わせる記述が見られ⁵¹、そこには ŚT の古説が伝えられていると推測される。

結語

以上、YD との関連を中心に ŚT および ŚTV の知覚論の一断面を概観してきたが、YD には ŚTV の中でもとりわけ ŚTV^b との共通性が見いだされた。特に精神原理の精神性を認識手段論と関連づけて論じ、その精神性との接触によって非精神的な器官が精神性を獲得する点、対象の把握に際してその対象の形相をとる感覚器官に関しては、ŚTV^b と YD との間の顕著な共通点であるといえよう。このことはすなわち、本稿で論じきれなかった、マナスによる追決定や想起 (smṛti) の問題に関しても、YD との関連で研究が進められるべきことを示唆しているともいえる。少なくとも以上のことから、ŚT の知覚論を再

Cf. YD ad SK28ab [p.203,28-30] : āhaṃkārikāṇāṃ tu teṣāṃ vyāpāratvād viṣayākāraparīṇāmātmikā vṛttir vṛttimato 'nanyā satī sambhavaty eveti suvacam prāpyakāritvam/ (【訓】一方、それら自我意識所成 [の感覚器官] は遍在しているので、対象の形相をとって転変することを本性とする作用は、作用を有するものと異なるものとしてありうるに他ならないから、[感覚器官が] [対象に] 到達して作用するというのは言いやすい。)

⁵⁰ Jayantabhaṭṭa (ca. 840-900) の *Nyāyamañjarī* (K. S. VARADACHARYA (ed.), Mysore, 1969) [p.69,10-12 (vol.I)] にも "sāmkhyās tu — buddhivṛttiḥ pramāṇam iti pratipannāḥ/ viṣayākāraparīṇatendriyādivṛtṭyanupātīni buddhivṛttir eva puruṣam uparañjayantī pramāṇam/" としてほぼ同様のサーンキヤ説が伝えられている (cf. 中井 [1980: p.104,n.21] [1981: p.76,n.7]). そして他の文献にも同様の見解が見られる。Cf. NKC [p.40,3-5 (vol.I)] : indriyāṇāṃ hi vṛttiḥ viṣayākāraparīṇatiḥ/ na khalu teṣāṃ pratiniyataśabdādyākāraparīṇativyatirekeṇa pratiniyataśabdādyālocanaṃ ghaṭate/ ato viṣayasamparkāt prathamam indriyāṇāṃ tādrūpyāpatīḥ indriyavṛttiḥ, tad anu viṣayākāraparīṇatendriyavṛtṭyālabhanā manovṛtṭiḥ/ ... ity abhidhānaḥ sāmkhyo 'py etenaiva pratyākhyātāḥ/; NKC [p.190,2-4 (vol.I)] : pratipuruṣam hi indriyavṛttiḥ prathamato viṣayākāreṇa parīṇamate tato manovṛtṭidvāreṇa, buddhivṛttiḥ ekataḥ saṃkrāntaviṣayākārā anyataś ca saṃkrāntacicchāyā viṣayavyavasthāpikā/ また、「聖者カピラの所説」(kapilamunimata) に対する解説の中でこれとほぼ同様の記述が SVR [p.72,6-11 (vol.I)] にも見られる。

⁵¹ 『金七十論』ad SK5 [p.1246,a16-17] : 對塵解證量者，耳於聲生解，乃至鼻於香生解。唯解不能知，是名爲證量 (【訓】塵に對して解するが證量なりとは、耳聲に於て解を生じ、乃至鼻香に於て解を生ず。唯だ解するのみにて知る能わず。是れ名づけて證量と爲す。) V₂ ad SK5 [pp.9,24-10,1] : dṛṣṭam nāma pratirūpādiṣu viṣayeṣu pañcasu cakṣurādīnām indriyāṇāṃ pañcānām eṣa yo 'dhyavasāyo nīscayaḥ, evam idaṃ nānyatheti/ M ad SK5 [p.9,15-16] : viṣayaṃ viṣayaṃ prati yo 'dhyavasāyo netrādīnām indriyāṇāṃ pañcānām rūpādiṣu pañcasu, tat pratyakṣam pratipattirūpaṃ dṛṣṭākhyam/

構築するには、各注釈書の見解を精査するのみならず、ṢT および ṢTV に通ずる見解を随所に含む YD との関連も考察する必要があることがわかり、SK 以前の知覚論を解明する上でも YD 研究の重要性が改めて浮かび上がる結果となった。

〈略号および使用テキスト〉

- G** *Gauḍapādabhāṣya: The Sāṃkhya-Kārikā: Śvara Kṛṣṇa's Memorable Verses on Sāṃkhya Philosophy with the Commentary of Gauḍapādācārya*, critically ed. Har Dutt SHARMA, Poona Oriental Series No. 9, Poona: Oriental Book Agency, 1933.
- M** *Mātharavṛtti: Sāṃkhya-Kārikā of Śrīmad Iśvarakṛṣṇa with the Matharavṛtti of Matharacārya*, critically ed. Vishnu Prasad SHARMA, Chowkhamba Sanskrit Series No. 296 (Work No. 56), 2nd ed., Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1970.
- NKC** *Nyāya-Kumuda-Candra of Śrīmat Prabhācandrācārya: A Commentary on Bhaṭṭākalāṅkadeva's Laghīyastraya*, vol. I, ed. Mahendra KUMAR, 2nd ed., Sri Garib Dass Oriental Series No. 121, Delhi: Sri Satguru Publications, 1991.
- PSṬ** *Jinendrabuddhi's Viśālāmālavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā, Chapter 1, Part I: Critical Edition*, ed. ERNST STEINKELLNER, Helmut KRASSER and Horst LASIC, Beijing: China Tibetology Publishing House ; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2005.
- PSV** *Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter 1*, ed. ERNST STEINKELLNER, available at world wide web http://www.oeaw.ac.at/Mat/dignaga/_PS/_1.pdf, 2005. (Accessed at 21:49:27 JST, 25 October 2009).
- SK** *Sāṃkhyakārikā* of Śvarakṛṣṇa: see **YD**.
- ṢT** *Śaṣṭitantra* of Vārṣaganya (quoted by Dignāga).
- STK** *Sāṃkhyatattvakaumudī* of Vācaspatimiśra: *Vācaspatimiśras Tattvakaumudī: ein Beitrag zur Textkritik bei kontaminierter Überlieferung*, ed. Srinivasa Ayya SRINIVASAN, Alt- und Neu-Indische Studien 12, Hamburg: Cram, de Gruyter, 1967.
- ṢTV^a** **Śaṣṭitantravṛtti*, first commentary (used by Dignāga)
- ṢTV^b** **Śaṣṭitantravṛtti* of Vindhyavāsīn, second commentary (used by Dignāga).
- ṢTV^c** **Śaṣṭitantravṛtti*, third commentary (quoted in ṢTV^b).
- SVR** *Syādvādaratnākaraḥ*, ed. Motīlāla Lādhā OSAVĀLA, 2 Vols., Dillī: Bhāratīya Buka Kārporeśana, 1988.
- T** 大正新脩大藏經.
- V₂** *Sāṃkhya-Vṛttiḥ (V₂)*, ed. Esther A. SOLOMON, Ahmedabad: Gujarat University, 1973.
- YD** *Yuktīdīpikā: the Most Significant Commentary on the Sāṃkhyakārikā*, critically ed. Albrecht WEZLER and Shujun MOTEGLI, Vol. I, Alt- und Neu-Indische Studien 44, Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1998.

(参考文献)

CHAKRAVARTI, Pulinbihari

- [1951] *Origin and Development of the Sāṃkhya System of Thought*, Calcutta Sanskrit Series No.30, Calcutta: Metropolitan Printing and Publishing House.

FRAUWALLNER, Erich

- [1958] “Die Erkenntnislehre des klassischen Sāṃkhya-Systems,” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ost-Asiens* 2, pp.84–139.

HATTORI Masaaki (服部 正明)

- [1968] *Dignāga, On Perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga’s Pramāṇasamuccaya from the Sanskrit fragments and the Tibetan versions*, Harvard Oriental Series Vol.47, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

KONDO Hayato (近藤 隼人)

- [2010] “A Comparative Study of Characteristics of the Perception Theories in the *Yuktidīpikā* and the *Yogasūtrabhāṣya*,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 58-3, pp.1134–1138.

MOTEGI Shujun (茂木 秀淳)

- [2000] “The Knower in the Sāṃkhya,” *The Way to Liberation: Indological Studies in Japan*, Japanese Studies on South Asia No.3, Vol.I, New Delhi: Manohar, pp.47–60.

OBERHAMMER, Gerhard

- [1961] “On the ‘śāstra’ Quotations of the *Yuktidīpikā*,” *Adyar Library Bulletin* 25, pp.131–172.

STEINKELLNER, Ernst

- [1999] “The *Ṣaṣṭitantra* on Perception, a Collection of Fragments,” *Asiatische Studien* LIII-3, pp.667–677.

有賀 弘紀 [2003] 「到達作用説とサーンキヤ哲学文献」, 『佛教學』 45, pp.91–111.

中井 本秀 [1980] 「Sāṃkhya 派知覚論について —— 『金七十論』と *Sāṃkhyavṛtti* を中心として ——」, 『論集』(東北印度学宗教学会) 第 7 号, pp.95–106.

- [1981] 「Sāṃkhya 派における *pramāṇa* 理論の受容形態」, 『論集』(東北印度学宗教学会) 第 8 号, pp.53–79.

本多 恵 [1980] 『サーンキヤ哲学研究』上, 春秋社, 東京.

村上 真完 [1982] 『サーンキヤの哲学 —— インドの二元論 ——』サーラ叢書 27, 平樂寺書店, 京都.

茂木 秀淳 [1984] 「サーンキヤ学派における認識主体の問題」, 『信州大学教育学部紀要』第 51 号, pp.117–128.

2010.3.12 稿

こんどう はやと 東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC1

Perception Theories of the **Ṣaṣṭitantravṛtti* in the *Pramāṇasamuccayaṭīkā*
(Chapter 1):

In Relation to the *Yuktidīpikā*

Hayato KONDO

Vārṣaganya's *Ṣaṣṭitantra* (ṢT) is no longer extant, and its fragments are available only from the literature of other schools. One of the most important reconstructions of the ṢT is that of its theory of perception, which is found in the first chapter of Jinendrabuddhi's *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (PST), a commentary on the *Pramāṇasamuccayavṛtti* of Dignāga (480–540). In this paper, I will discuss the three commentaries, **Ṣaṣṭitantravṛtti* (ṢTV) (ṢTV^a, ṢTV^b and ṢTV^c), from the perspective of the definition of perception in the ṢT. I will also discuss their relation to the *Yuktidīpikā* (ca. 680–720, YD), a commentary on the *Sāṃkhyakārikā* (SK). The ṢT characterizes perception as the function of the sense faculties (*indriya*) that are controlled (*adhiṣṭhita*) by the mind (*manas*). Therefore, I particularly examine the function of the mind and sense faculties in the ṢTV and the YD.

The ṢTV^b regards perception as the instrument of valid cognition (*pramāṇa*) that requires sentience (*caitanya*) of the Spirit (*puruṣa*). Perception arises with the mind providing sentience for the operation of the sense faculties through the mind. Similarly, the YD discusses the Spirit in relation to the *pramāṇa* theory and considers that the sense faculties, when they are provided with sentience through the 'adhiṣṭhita' of the mind, begin to grasp objects. Furthermore, the ṢTV^a and ṢTV^b consider that sense faculties, in grasping objects, transform into the form of those objects. YD also holds that view. Since the SK defines perception as the function of intellect (*buddhi*), it is natural that the ṢT and the YD have different views on perception. However, their points of agreement are noteworthy.

Thus, the YD shares common features with the ṢTV, especially ṢTV^b. In addition, we have found text in the YD that might have been quoted directly from the ṢT. Consequently, it is necessary to take into account its relation to the YD, which holds similar views to the ṢT and ṢTV, in order to reconstruct the perception theory of the ṢT and to reaffirm anew the importance of the study of the YD.